

1. ポイ捨ては単なるマナー違反でない

ある日の午後3時半頃のことだった。家の裏手の道路に出たら近くの中学校の生徒と思われる3人連れが、500ml入りの缶ジュースを抱えおしゃべりをしながら自転車で通りかかった。ああもう学校が終ったのかと思いながらその行き先をぼんやりと見ていた。ところが、なんとその生徒たち田んぼ道に出たとたん飲み干した大きい缶を次々と田んぼに勢いよく放り投げて行ってしまった。

私自身近くに畑を借りているが、道路端の為やたらと空き缶や紙くずなど捨てられる。そこで、どんな人たちが捨てていくのか知りたいと思っていた矢先が、今回の出来事だった。大声を出せばなんとか聞こえる距離だったので、注意してやろうと思ったが、躊躇（相手は3人連れ）している間に、相手は自転車なのですいすいと何事もなかったように行ってしまった。

この件が今更どうなるわけでもないのを見て見ぬふりをしてそのままにしておくのが無難と思ったが、これから地域や日本をしょって立つ子どもたちがこんな簡単なマナーが守れないのかと考えたらこのままにしておけないとつまらない考えをしてしまった。思案した挙句、近くの中学校の生徒に違いないと思ったので学校に電話をしてみることにした。電話に出たのは用務員さんのようであったが、事情を話したら校長先生に取り次いでくれたので自己紹介し、こういう現場を見てしまったと事情を話した。併せて区長時代X小学校支援会議の役員をしていて、生徒の行動について関心があったことを伝えた。すると校長先生もX小学校支援会議に出席をしていたと自己紹介され、生徒はどんな服装をしていたのかと聞いてきた。はっきりした記憶はなかったが、3人とも上下黒っぽいジャージ姿だったようだったと話したら、うちの学校の生徒の服装と異なるようなことを言ってきた。しかし、行為自体は問題なので何処の学校の生徒かわからないが、そういう場面があったことを伝え指導すると言って丁重に電話を切った。

私もX中の生徒とはっきりした証拠があるわけでもないのでも宜しく願いしますと電話を置いた。翌朝になって缶が捨てられた田んぼに行ってみたら捨てられたジュースの缶が見当たらなかった。その見当たらなかった原因はわからないが、もしかしたら田んぼの持ち主が見回りに来て拾い出して片づけたのか、或いは捨てた生徒が注意を受け拾いに来たのか、或るいは本人達の良心が咎め、拾いに来たのかは定かでないが、缶が捨てられた現場に見当たらなかった。

話題は転ずるが、世界文化遺産であり日本のシンボルである富士山に、外国人観光客が大勢押し寄せマナーが問題となっている。ところが、その山麓には日本人が捨てた家庭ごみや産業廃棄物がなんと大量に発見されているという。そこで世界遺産である富士山は足元から危機に瀕しているとテレビが報じていた。今回の空き缶のポイ捨ての件も、些細なことではあるが「蟻の一穴」ということもありうる。本件が老いばれ老人の取り越し苦労であってくれればと願っている。

2. 挨拶は社会のルールだろう

我が家の北側の道路は通学路（大人の散歩道でもある）となっていて小学生と行き交うが、最近「おはようございます」とか「こんにちは」とか挨拶をしてくれる生徒がいるので嬉しくなりずっと続けてもらいたいと願いを込めて、返事を返している。

また、畑（家庭菜園）にいるといろんな人たちが自転車で通りかかるが、大方の人は何事もなく行ってしまうが、ある見知らぬ女性の方は必ず「こんにちは」と挨拶をしてくれる。山にハイキングに行くと（最近は少なくなったように感じる）行き交う人と挨拶を交換するが、山の爽やかさと相まってとっても気持ちの良いものである。

我が家では夫婦でも起床して初めての対面するときは、おはようとか、就寝前は必ずお先にとかいって言葉を交わしているが、お互いの潤滑油にもなっている。

そこで、私自身挨拶なんて当たり前で空気みたいなものだと思って過ごしてきたが、改めて小学生や見知らぬ人に挨拶をされると、嬉しさとその重要性に気づくのである。ところが、地域のいろんな人や場面に接すると必ずしもそうではない。

私は、毎日決まったコースを散歩しているが、そのコースの中で必ず幾人かの人たちと出会うが、お互い見知らぬ人でも「こんにちは」と挨拶をするように心掛けている。そこで、快く挨拶を返してくれる人、さらに話しかてくる人、会釈してくれる人、視線を合わせず行ってしまう人など様々である（大方の人はこれ）。中でも、帽子を深くかぶりサングラスをかけ大きなマスクをしていると人と出逢うと、どんな人なのか見当もつかないでいるが、だいたい顔を反らして行ってしまうから複雑な気持ちになる。

また、いつも顔を突き合わせる指導的立場の人なのに、こちらから挨拶してもはっきりと「おはよう、こんちわ」を発しないから、何となく顔を合わせることになる。それでは気まずいので、こちらから当たり障りのない何らかの話題を見つけて対話するようにしている。しかしとっさの時には、うまい話題が浮かばない時もある。

他に、近所の人なのに自転車で追い抜きざまにこちらを見ないふりしてすっと思ってしまう人。代替わりして田畑に出るようになった主婦が、行き交うと必ず目をそらしてしまっ挨拶をしてくれない。ところが、地区の行事等で会うとこれまた丁寧な言葉で挨拶をしてくれるから戸惑ってしまう。そうであるから挨拶をするのは知っているらしいが、相手と時と場合によってはしないのである。

挨拶をしない、或いはしたりしなかったりとは何か意図があつてのことか、照れ臭いのか定かではないが、挨拶をするという環境に育っていなかったとしたら気の毒な方だなとは思いますが、挨拶されないとこちらの気分はすっきりしない。

会社に勤務していたころ、工場の活動方針として「にっこりこ運動」なる活動を推進していたことがあったが、これも挨拶運動の一つで、社員同士の心の通いあいを通じて生産性の向上が図られるという目的だったのだろう。

また、終戦直後の昭和 21 年の NHK ラジオ歌謡に「朝はどこから」というのがある。歌手の岡本敦朗さんと安西愛子さんが歌って大ヒットした曲である（昭和 21 年 6 月、コロムビアレコードから発売）。この歌詞は 1 番から 3 番まであり一番は、「おはよう おはよう」、2 番は「こんにちは こんにちは」3 番は「こんばんは こんばんは」で締めくくる。この歌は終戦直後の昭和 21 年 3 月敗戦直後の日本を励ますため朝日新聞が健康的なホームソングを全国募集したものであるが、この歌を時々聞くがとっても爽やかになる。そこで、今更ながら挨拶はなぜするのか考察してみた…。

①社会のルールであり常識だから②相手からの印象が良くなり、人間関係が円滑になるから③挨拶をする方もされる方も、気持ちが良いから④会話のきっかけとなる

挨拶は何の道具も何の準備もいらない。ただ笑顔で言葉を発するだけで、人間関係を円滑にし、新しい人との絆をつくり、相手を良い気分にする。そして、自分自身の評価を上げ気分もよくしてくれるのである。そこで、人生の達人でもある高齢者がまともな挨拶をしないなんて情けない。自分たちの孫には挨拶の大切さをしっかりと教えてやりたい。

3. 車の出先を譲ってくれるとの思いは甘かった

隣市の文化会館で開催された自衛隊による吹奏楽演奏会に参加しての帰りのことだった。演奏会は午後 2 時から開演しあっという間に終了し爽やかな気分が終わった。

時計を見たら午後 4 時を回っていてサ一帰ろうと席を立った。ところが、超満員の会場からはなかなか出られず、人の流れに身を任せやっとの思いで会館の外に出たら午後 4 時半（冬場の 4 時半は日が傾く）近くになっていた。

私達は、帰途に立ち寄り先があるので早めに帰ろうと大した考えもせず玄関から直近のところに駐車した。ところが、なんと駐車場は大混雑で私が出ようとしている先はびっしりと車列が続いてしまっていた。何処かで割り込ませてくれるだろうと安易に考えていたが、なんと一向に譲ってくれる気配はなかった。

あまりの待ち時間にイライラしていると隣席の妻から、出先を譲ってもらうなら頭を下げてアピールしてみたらと云われてしまった。しかし、運転手さんは一向にこちら目を合わせてくれる様子はなかったのである。（意識的に感じられた）。

それでもじっと譲ってくれるのを待っていたが、埒があかないので自身の車をそろりそろりと前進させ相手に、先を譲ってくれるようアピールしようとしたところ、ものすごい剣幕で睨まれてしまった。そこで諦めてしばらく車列の通り過ぎるのを眺めていたが、とうとう先を譲ってくれる気配はなかった。

ずっと待った挙句、やっとの思いで会場を後にしたが、車の中で妻と言い合いになって、予定していた立ち寄り先にも行かず帰宅してしまった。

反省として、私自身混雑するところは嫌いなので最近あまりこういうところに来たことがなかった為、先を譲ってもらえるという安易な考えをしてしまった。駐車する

際の場所取りの要領も悪かったらしい。急いでいるのなら演奏が終わらないうちに席を立てばよかったのかなどと色々と考えさせられたのである。併せて自分が逆の立場だったら、相手に気持ちよく先を譲ってあげられたのか？色々考えを巡らしてしまった。因みに道路で走行中、そういう場面に接したら通常1台は入れてやるようにしているが、複数の車に譲ってしまうと後続車の迷惑（何か言われそう）になるということも考慮し、後は後続車の意思にお任せをするという考えでいる。

4. 高齢者の自動車運転事故が多発している

1年ほど前、妻が片側一車線の主要地方道を通行中、高齢者の運転する車に追突されるという事故が起きた。妻の車は購入後ちょうど1か月経過したばかりで事故の連絡を受けたとき、孫も同乗していたので驚いた。車の後部は中破し、ピカピカのナンバープレートもへし曲がった。追突した運転者は渋滞中のノロノロ運転で居眠りが起きたという。幸い妻（同乗の孫は無事だった）の怪我はたいしたことはなかったが、整形外科に3か月通院した。

最近、高齢運転者の事故が続発し社会問題化している。アクセルとブレーキを踏み間違えてコンビニに突っ込んだ。病院の玄関から待合室に突っ込み13人が怪我をした。高架の駐車場から防護柵を破り地上に落下した。高速道路を逆走し衝突事故を起こした。通学途上の小学生の列に突っ込んで多数の死傷者を出した。直近では90歳女性運転者による4人の死傷事故等々悲惨なニュースが毎日のように報道されている。その要因は運動能力や判断力の低下、さらに認知症などが原因と言われている。そこで平成28年（2016年）11月15日に総理官邸で開かれた閣僚会議で、安倍総理が石井国土交通大臣、加藤一億総活躍大臣らと交え、事故の未然防止に向けた対策について協議したそうである。安倍総理は、2017年3月に施行を予定（2017年3月12日より施行）している認知症対策を強化した改正道路交通法の円滑な施行に万全を期すとともに、自動車運転に不安を感じる高齢者の移動手段の確保など、社会全体で高齢者の生活を支える体制の整備を着実に進めていくとしている。

だが、実際問題として東京都などの大都市では公共交通機関が充実しているところは何とかなるだろうが、公共交通機関の希薄な地方都市では財政的な問題で難しいのが現実だろう。ネット上などでは「暴走老人の免許を取り上げろ！」「高齢者は自動ブレーキ付きの車以外は乗れないようにしろ！」や、運転適性チェック（認知症検査）の厳格化などを求める声が上がっているが、2018年77歳（免許の更新時）となる自分としても他人ごとではなくなってしまったのである。

私自身の免許更新時の認知症検査は菱の実会ホームページを参考にさせていただき余裕で通過した。現行の道交法では、70歳以上での運転免許更新時は「座学と実技講習」を受けなければならないが、更に75歳以上の高齢運転者には認知機能検査が追加され、得点の程度に応じて（3段階あるが、最低ランクでは専門医の診断が必要）座学と実技の「高齢者講習」を受けなければ免許の更新ができない。ところが、高齢化社会となり対象者が多いため早めに申し込まないと免許の更新時期ぎりぎり

の講習となってしまうようだ。

高齢者に対してのなにがしかの運転規制についての気持ちはわからないではないが、クルマは地方で生活する高齢者にとってなくてはならない「足」である。危ないからと言って運転免許証の返還をさせれば生活は成り立たないのが現実である。

一方、自動ブレーキ付きの車が義務化されたとしても収入の少ない高齢者は高価な車を簡単に手に入れることはできないだろうからマイカー導入には時間がかかる。

しかし、万が一にも大事故を起こしたら最悪刑務所行きとなり獄中で死ぬか、孫たちにも顔向けができない羽目になる。何れにしても老いは誰にでもやってくるので、細心の注意を払って運転するしかないが、自信が無くなったら即刻免許は返上すべきだろう。そうでないと本人や被害者は勿論のこと、他の多くの高齢運転者にも迷惑が及ぶことになる。

5. 後期高齢者の仲間入り

▼後期高齢者医療保険

後期高齢者とは 75 歳以上の人達のこと、後期高齢者医療制度を作った時の（自民、公明の政権）社会保障審議会の後期高齢者医療の在り方に関する特別部会では「75 歳以上の後期高齢者の特性」について次の様に纏めている。

①老化に伴う生理機能の低下により、治療の長期化、複数疾患への罹患、特に慢性疾患が見られる。②多くの方に認知症が見られる。③いずれ避けられぬ死を迎える。

「上記の特徴に応じきめ細かい医療制度にする」「高齢化が最も進んだ日本が持続可能な医療制度のモデルを世界に提示する」と国会で舛添厚生大臣が述べたのであるが、突き詰めれば高齢者福祉は『枯れ木に水をやるようなもの』だともとれると批判が、数多くあった。私自身、満 75 歳の誕生日 1 か月前に突然「後期高齢者医療保険証」なるものが届いた。そこで、75 歳になれば後期高齢者になるのは頭では解っていたが、いざ保険証を手にとってみると来る時が来たなというのが実感だった。

ところが、後期高齢者健保は保険料が大幅に値上がって保険料は年金差っ引き、さらに受診料が 1 割から 3 割負担（1 年後には 1 割に戻ったが）になり、さらに加入単位は個人であるため配偶者は単独で国民健康保険などに加入しなければならない。

ただし配偶者が加入する国民健保は通常より安い保険料であるようだが、その負担は本人の年金から差っ引きでなく世帯主負担なのであるから合計すれば相当な値上がりである。収入は激減し負担は大幅な増加でお先真っ暗であるが、要はそれなりの負担をしろということであろうが、ていのよい老人の切り捨て制度でなければよいがと危惧している。

▼介護保険

昭和 29 年（2017 年）5 月 23 日の朝日新聞の一面に「介護保険料 3 割負担」現役並み所得者来年 8 月からと大きく報じられた。介護保険サービスで現役並みの所得がある人の自己負担割合を 3 割に上げる介護保険法などの改正案が 25 日参院厚生労働委員会で自民党、公明党、日本維新の会などの賛成多数で可決され、26 日の参院本会議で成立した。現在は介護保険料の自己負担割合は原則 1 割である。

介護保険の費用は制度が始まった平成 12 年（2000 年）3 兆 6,000 億円から膨らみ続け今は 10 兆円を超すといわれている。今後も負担が下がることはありえないだろうから、我々が介護を必要とするときに高負担は避けられなくなるだろう。そこで、何としても健康で過ごさねばならないし、最後はコロリと逝かねばならないのである。

自身は三菱電機勤務中から老後の生活について考慮し電機労連の年金積み立てや退職金の年金化などして退職後の収入の激変を避けることに対処してきた。

ところが、これらはみな有期で電機労連の個人年金は 70 歳で終了し、さらに退職金が原資の年金は 75 歳で終了となってしまった。そこでこれからは企業年金（あるだけ幸せであるが）と厚生年金のみとなるが、厚生年金は年々ダウン（物価連動）し企業年金がなかったら生活を切り詰めないとやっていけない。

▼高齢者の生活実態は悪化している

総務省統計局の「家計調査年表」によると「高齢者無職夫婦の家計収支（夫 65 歳以上、妻 60 歳以上）」の年金生活者は、年金収入だけでは支出を賄うことはできず、現役時代に貯めた貯蓄や退職金を取り崩して生活しているのが実態だという（我が家も同然で赤字）。「収入」は、ほとんどが公的年金（物価に連動する）で収入から年間支出額（消費支出と非消費支出（税金・社会保険料）の合計額）を差し引くと、収支は赤字。これが年金生活者の家計の特徴である。そこで赤字分は、貯蓄などを取り崩している。ダイヤモンドオンラインの深田氏によると 2010 年の年間収支は約 45 万円の赤字。年々赤字額は増え、2015 年にはなんとマイナス 75 万円まで拡大しているという。赤字がどんどん増えていく要因を知りたくてエクセルに詳細なデーターを入力し推移を分析すると年金収入は思った以上に減少し、消費支出（食費やレジャー費など）はそれほど大きな変化はなかった。税金や社会保険料の負担は増えているはずなのに、消費支出も思った以上に増えていない。

そこで筆者の予測だが、介護保険料や後期高齢者の健康保険料は公的年金から天引きされるため、「年金の額面自体」が減ったと考えた高齢者（アンケート記入者）が多かったのではないか。いずれにせよ、家計収支の赤字拡大の要因は、「お金の使い過ぎ」ではなく、「年金の手取り減少」だということが分かったそうだ。

手取り額とは、「額面の収入」から「所得税・住民税＋国民年金保険料或いは後期高齢者保険料・介護保険料」を差し引いた金額のこと。

年金収入が厚生年金と企業年金の合計で 300 万円ある人の手取り額を試算してみると 1999 年には 290 万円あったのだが、2016 年は 275 万円。なんと 17 年間で 33 万円も減っている。原因は、税金と保険料の負担アップである。1999 年は介護保険料が導入されていなかったのも「使えないお金」は国民健康保険料が 10 万円程度だけ。今より高齢者向けの税金優遇もあり、所得税・住民税はかからなかった。

しかし現在は介護保険料（2000 年に導入）もかかり、国民健康保険料はアップし、高齢者向けの税優遇は廃止・縮小（老年者控除の廃止、公的年金控除の縮小）され、所得税・住民税がかかるようになった。東京 23 区内に住んでいる人の例だと、社会保険料が 30 万円、所得税と住民税合計で 13 万円かかる計算となる。

こんな数字を見ると、これからは死ぬまで働き続けなければならない時代になるのではないかと不安な気持ちにさせられる今日この頃である。

▼老後資金の目安＝下記 A と B の合計額

老後資金の目安として A・65 歳から 90 歳までの 25 年間の「年間収支の赤字」の合計額。B・病気への備えや住宅の修繕費、クルマの買い替え費用などの数年に一回の「特別支出」とがある。25 年間の特別支出を 1,000 万円と見積もったとする。年間収支の赤字額が 15 万円なら 25 年間で 375 万円、特別支出と合わせると、老後資金の目安として 1,375 万円の計算となる。ところが、年間収支の赤字額が 66 万円なら、取り崩し額は 25 年分で 1,650 万円、特別支出との合計額は 2,650 万円にもなる。

▼身近なところ（敬老の日）でも優遇は縮小されている

私の住んでいる市では後期高齢者になると「敬老の日」にちなんだ、市から 2,000 円の金券と区長会からタオルが支給される。自身が数年前区長だった頃は 5,000 円の金券とタオル、お菓子等の事前配布があったからここ数年で大幅な削減なのである。

また、「敬老の日」は老人センターで行われる式典に招待されることになっていたが、数年前から後期高齢者が大幅に増加したため招待者が施設に収容し切れなくなった為地区の行政センターに変更になり 1 日 3 回、地域毎の開催になり催し物も縮小された。それでも今後参加者が増えれば収容しきれなくなるのではないかと云われている。そこで自身はずっと参加を辞退していたが、今年は後学の為出席することにした。

また、この原稿を書いている最中に市の福祉部門から手紙が届いた。その内容はこれから高齢者の増加が予想されるため祝い金を 2018 年度より、75 歳から毎年でなく 5 年ごとの支給（一回の支給額は多少アップされるが、5 年毎になると貰えない人が増加する）に変更になるとの通知なのである。

あーあ高齢者、人は誰でも老いるのは自然の理でありどんな形であれ敬老の精神は必要で、廃止だけはしてほしくないね。尚、私の親達の頃は 65 歳以上になると郵便貯金の金利にプレミアムが付いた記憶がある。

▼すこしは利点もあるが

ただし高齢者になって悪いことばかりではなく、イオンシネマの入場料が半額程度で入場でき、公共施設である国立の森林公園・海浜公園や上野動物園などの入場料は半額程度に割引されるところもある。太田市では 65 歳になるとシニアパスポートが送られてきて市営の風呂等が割引される。

また、群馬県の方は「ぐーちょきシニアパスポート」（太田市であれば各行政センターで発行してくれる）を加入店で提示すれば 5 パーセント割り引いてくれる。ところが私自身はどれも利用する機会がほとんどない。

国では 65 歳以上の人で、65 歳、70 歳、75 歳、80 歳などの人を対象に生涯一回だけ 5,000 円（8,500 円のところ市町村が 3,500 円補助）で肺炎球菌の予防接種を受けることができる。他にインフルエンザの予防接種が 1,000 円負担、70 歳以上は生活習慣病の特定検診（太田市では該当する項目の無料受診券が配布される）が、無料となっているのは有難いし感謝しなければならないだろう。

6. 高齢者は病気の不安が付きまとう

ある日の夕食時、妹から電話があった。普段、妹たちと頻繁に電話のやり取りがあるわけでないのでこの時間帯に電話があると一瞬なんだろうと勘繰ってしまう。電話を受けるとかけてきた妹もあまりいい話ではないと切り出した。

実はねえ、実家の兄さんが今度は心臓の手術をしなければならなくなるんだってである。ええ、例の「がん」のほうかほぼ回復して一安心したばかりなのに今度は心臓の手術かと驚いた。自身も驚いたが、当の本人もさぞ落胆しているだろうなと思った。

以前、がんを宣告されたと病院から私自身に電話をかけてくれたとき時の悲壮な声を思い出し溜息が出た。誰だってがんを宣告されたら動揺するのが当たり前であるが、電話を受けた私自身も慌てて慰めの言葉が見つからず窮した。

我々夫婦も毎年健康診断を受けているが、幸いたいしたことはないが、なにがしかの異常が見つかる。私自身は 6 年前の健康診断で心電図に異常があるといわれ、掛かり付け医から大病院を紹介され 24 時間計測できるホルター心電図やシンチグラム検査（自己負担金 35,000 円）などしたが、何れも異常ありとなり最終的にはカテーテル検査（自己負担金 85,000 円）をした。

ところが、検査の結果これっぽっちも異常はなかったのは幸いだったが、毎年受ける健康診断で心電図の異常が必ず点灯する。

7. そろそろ終活・墓を買って石塔を立て身辺整理をスタート

ある時妻からこんなことを言われた。あのね！趣味が多いのはいいが、子ども達に墓を用意しておかなかったなどと愚痴言われないようにしておきたいねと云われた。

我が家は新宅で先祖代々の墓があるわけでないので、いずれ自分の入るところは必要だとは漠然には思っていたが、言われてみれば反論の余地はない。

何年か前、区長をしていたころ寺世話人から、寺の墓を買わないかと持ち掛けられたことがあった。その時点ではまだずっと先の話だと思っていたから「ぼちぼち」ねと笑いで終わってしまった。ところが、その後市の広報で市営墓苑の売り出しを知った。今度売り出すことになった墓苑はこれ以上の造成がない限り満杯に近づきつつあるらしく今回の発売が最後になるらしいというようなことを耳にした。

また、我々の後続く世代は戦後のベビーブームで生まれた団塊の世代であり墓の需要が逼迫すると思ったから買うのであれば今しかないだろうと真剣（子供たちに愚痴を言われなかったために）に考えた。更に今回の発売も申込者が多数であれば抽選ということであったので気持ちを後押しすることになった。

幸い？申し込みの結果抽選に当たったが、申込者の1割くらいの人が抽選に漏れたようだ。市営墓苑の抽選に当選したという通知を受けたのはいいが、3年以内に墓石を建てろと言われたのには驚いた。従来市営墓苑を買った人たちに話を聞くと今回の売り出し価格を大きく下回り、3年以内に石塔を立てろなんて言われなかったと云っていた。

何故今回3年以内になんて話が出てきたのかよくわからないが、なかなか設置する気になれずにいたが、3年目の期限が迫ったので仕方なく墓石を建てることにした。発注してから暫らくして設置完了通知があったので、墓を見に行ったら石塔の横に建立日と、私と妻の氏名が赤い字で刻まれていた。

我々もいつかはここに入らなければならないが、身辺整理（遺言状作成・諸々の解約手続先等の纏め・庭木の整理他）も含めてあの世に行くのも大変だなと改めて感じている今日この頃である。

余談

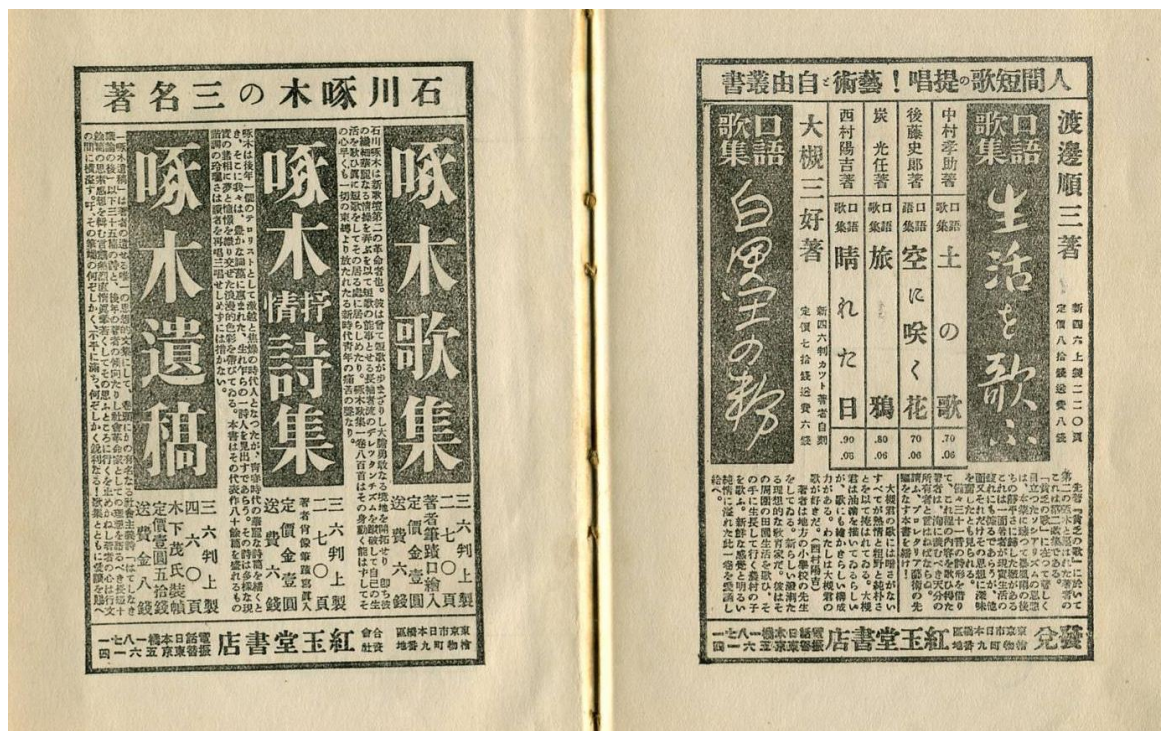
太田市美術館・図書館（太田駅北口・東側に小規模駐車場有）にて

「ことばをながめる、ことばとあるくー詩と歌のある風景」展（2018・8/7～10/21）が開催されています。出展作家の中に私の伯父夫妻である「大槻三好・松枝夫妻短歌」と「惣田紗希＝イラストレーター」のコラボ「短歌－イラストレーション」コーナーがあります。65 歳以上無料で入場できますので興味のある方必見かと思います。

▼ 大槻三好略歴

《元小学校長・高校美術講師・画家（各種中央展入選）・歌人（自由律短歌）・詩人》
 <著作>【歌集・白墨の粉】昭和 3 年紅玉堂出版／【児童歌集・小鳥の歌】昭和 7 年
 【歌集・花と木馬】昭和 9 年／【児童短歌論・童心に短歌を培う】昭和 17 年／
 【伝記・童謡の父・石原和三郎先生】昭和 30 年／【研究・明治唱歌の恩人石原和三郎】昭和 47 年／
 【研究・自由律短歌の先駆者高草木暮風】昭和 49 年／【研究・石原和三郎と明治唱歌抄】昭和 52 年／
 【歌集・垂曲線】昭和 55 年／【随筆・恩頼抄】昭和 55 年／【郷土民謡研究・八木節考】昭和 57 年／
 【随筆・思い出は歌に乗って】昭和 59 年／【教壇回想記・太平楽】昭和 61 年／
 【明治唱歌の父・石原和三郎】平成 5 年（本人没後、遺稿をもとに遺族の手によって出版）／他、市内小中学校校歌多数作詞、群馬大学 100 周年記念歌【あかつき告げる】作詞など。

▼大槻松枝略歴《元小学校教員》<著作> 歌集【紅椿】長男を産んだ直後 26 歳で没。【紅椿】は松枝が詠んだ 2,500 首の中から夫である大槻三好が編集し出版。その時生まれた長男の子供が三菱電機ホーム機器に勤務したが途中退職。



※【紅玉堂書店】昭和 3 年発行の歌集に載った『白墨の粉』大槻三好著の広告